

**令和 2 年度秋田県総合政策審議会
第 1 回農林水産部会 議事要旨**

1 日時 令和 2 年 7 月 10 日（金） 午後 3 時 38 分～午後 5 時

2 場所 総合庁舎 6 階 6 0 1 会議室

3 出席者

【農林水産部会委員】

江 幡 隆 一	（丸果秋田県青果株式会社常務取締役）
工 藤 浩 一	（農事組合法人たねっこ統括主任）
工 藤 裕 紀	（秋田県漁業協同組合専務理事）
田 口 宗 弘	（秋田県木材産業協同組合連合会副理事長）

【県】

伊 藤 真 人	（農林水産部次長）
安 藤 鷹 乙	（農林水産部農林政策課長）
福 田 正 人	（農林水産部農業経済課長）
草 薨 郁 雄	（農林水産部農業経済課販売戦略室長）
阿 部 浩 樹	（農山村振興課長）
藤 村 幸司朗	（農林水産部水田総合利用課長）
加賀谷 由 博	（農林水産部水田総合利用課秋田米ブランド推進室長）
本 藤 昌 泰	（農林水産部園芸振興課長）
畠 山 英 男	（農林水産部畜産振興課長）
舩 谷 雅 広	（農林水産部農地整備課長）
工 藤 輝 喜	（農林水産部水産漁港課長）
沼 倉 直 人	（農林水産部林業木材産業課長）
戸 部 信 彦	（農林水産部森林整備課長）
桜 庭 和 矢	（企画振興部総合政策課）
小 関 裕 紀	（観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課）

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4 農林水産部次長あいさつ

○ 伊藤次長

委員の皆様においては、審議会に引き続き、出席いただき感謝申し上げます。また、今回は委員の改選に当たって、快くお引き受けいただき、改めて感謝申し上げます。

第3期ふるさと秋田元気創造プランについては、今年度3年目を迎えており、昨年度の部会でいただいた意見を踏まえ、各施策で目標の達成に向けた取組を展開している。

農業の分野においては、複合型生産構造への転換を進めた結果、日本一を目指すえだまめやねぎの出荷量が着実に拡大しているほか、京浜中央市場において、しいたけが出荷量、販売単価、販売額の販売三冠王を達成した。また、平成30年の農業産出額において、コメ以外の品目が過去20年間で最高額を記録するなど、着実に成果が上がってきている。

また、林業木材産業においては、非住宅分野での県産材の需要拡大や、低コストな再造林の取組を進めているほか、水産分野では、昨年開催した全国豊かな海づくり大会を契機として、地魚の認知度向上や、つくり育てる漁業の更なる推進に取り組んでいる。

一方で、人口減少の進行を背景として、農林水産業の現場においても労働力不足が深刻化してきており、多様なルートや幅広い年齢層での担い手の確保・育成が喫緊の課題となっている。

県では、構造改革の流れを加速し、米依存からの脱却を確実なものにできるよう、競争力の高い経営体の育成や複合型生産構造への転換に向けた取組を強化するとともに、ICT等の先端技術を活用した次世代型農林水産業の展開など、生産性の向上に向けた取組を更に進めてまいりたいと考えている。

本日の部会においては、現在、県が進めている取組を紹介した上で、今後の農林水産行政の方向性等について、幅広い視点から御意見をいただきたい。また、現在、新型コロナウイルスによって大きな影響を受けているが、今後こういった取組が必要か御意見いただければと考えている。委員の皆様には、忌憚のない御意見をいただくようお願いする。

5 部会委員の自己紹介

○ 江幡委員

丸果秋田県青果の江幡と申します。日頃から、県庁の皆様にはお世話になり感謝申し上げます。当社は、秋田市外旭川の市場にある会社だが、いつも社長が話していることとして、経営戦略を持った、自分の収入や生活を組み立てられる「プロの農家」を育てるべきだということがあり、そういったことの一助となるよう様々な取組を行っている。一例としては、「一徹豆」というえだまめのブランドを作り、秋田県からも特産品として認定していただいたが、御所野にある食品会社の低温倉庫で加工し、それを運送会社と組んで、関西圏のスーパーに販売するなど、様々な取組を右往左往しながら続けている。そうした過程で、秋田県の野菜は、首都圏の

方にとっては高地野菜というイメージがあり、関東以西では夏に穫れないこともあって、長野県などの野菜と同じ位置付けでニーズが高く、首都圏に展開するスーパーから直接声が掛かったりしている。例年だと、今の時期は、スーパーのバイヤーが2～3日おきに東京から来るのだが、今年はコロナの影響で全部リモートになっている中で、引き続き秋田県産野菜のニーズは高い。また、県内の野菜を東京の大田市場に流して、東京の卸業者から東京のスーパーに売るといった従来の流通経路だけではなく、秋田の野菜を直接東京のスーパーに売ることが農家所得の向上に資すると考えて、取り組んでいる。よろしくお願いします。

○ 工藤浩一委員

大仙市から参りました、農事組合法人たねっこの工藤と申します。今年、たねっこの15周年を迎える年だが、コロナの影響で催し物ができていない状況にある。江幡委員から、プロ農家を育てるという話があったが、社長からも何回も拝聴し、そのとおりだと思っている。私は、普段、スマート農業と野菜づくりの担当、加えて、たねっこ全体の作業の流れを統括しているが、そうした中で、次の若い人達にどんどん来てもらい、興味を持ってもらうために、今年のたねっこの職員全員のキャッチフレーズは、「かっこいい」とし、ある意味、格好良い農業をやって、子ども達に興味を持ってもらおうと頑張っている。よろしくお願いします。

○ 工藤裕紀委員

秋田県漁業協同組合の工藤と申します。今、漁業においても担い手対策が一番の問題であり、平均年齢が65歳くらいの中、若手の漁業者が非常に少なく、早晩、大幅な世代交代が起こる状況にある。漁業は、活動の場が公有水面、かつ対象とするものが無主物、誰のものでもない、早い者勝ちということで、農業等の場合とそもそも土俵が違う中で、いかにして漁業者を育てていくか。新規に入ってきたとしても、自立するのは難しい中で、先程来お話がある複合的な経営を考えて、漁業の中だけでの複合ではなく、一次産業や他産業との複合や、一定期間の雇われでもよいと思う。漁業は、自営しやすい産業で、夏場のアワビやサザエ、イワガキなど、頑張って1か月に100万円以上水揚げしている若い人もおり、自分が頑張った分だけ実になるものであるし、別に生活資金を得られる職を探して、従事するというパターンもある。いずれ、大幅な世代交代が起こる中で、そういったことに取り組んでいる。よろしくお願いします。

○ 田口委員

秋田県木材産業協同組合連合会副理事長を仰せつかっている田口と申します。今年度は、農林水産部会の「林」ではなく、その川中側の木材産業の団体から、この会議に出席させていただいている。林業の方はだいぶ国や県の施策の後押しがあり、成長産業化を目指す中で雇用も成長に向かった軌道を見せているが、川中である製材所は、大型化する全国の競争の中で少し立ち後れたような状況になっている。人口減少も相まって住宅着工が減少するなどの逆風がある中、非住宅や都市景観の木質化、SDGs、ESG投資など、持続可能な製品なので、新たな部分での取組、アイデアを出すことによって、秋田スギ並びに針葉樹、広葉樹の製品部分

の成長産業化に、製材所もいかにして取り組んでいくのかを考えている。数少ない機会ではあるが、できる限りの提言をして、それが採択されて次に繋がっていけばよいと思う。よろしくお願いします。

6 部会長選出、部会長代理指名

委員互選により、江幡委員が部会長に、部会長の指名により、工藤裕紀委員が部会長代理に指名された。

7 部会長あいさつ

○ 江幡部会長

右も左もわからないうちに部会長になったが、よろしくお願いします。

8 議事要旨

○ 江幡部会長

審議内容は議事録としてホームページに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要がないと思うので、公開としたい。

それでは議事（１）について、事務局から説明をお願いします。

□ 事務局（農林政策課）

～資料１により説明～

○ 江幡部会長

では、次に議事（２）、農林水産戦略の推進に関する意見交換に入りたい。意見交換を行う前に、当部会で所掌する農林水産戦略の各施策に対する取組について、事務局から説明をお願いします。

□ 事務局（農林政策課）

～資料２、資料３により説明～

○ 江幡部会長

事務局から説明のあった今年度の取組内容を踏まえ、資料３にある議論の主なポイントを中心に、委員の皆様から２、３点について意見をいただきたい。

○ 工藤浩一委員

私からは、資料３の３番、自分が取り組んでいるスマート農業と、１番、担い手・労働力の確保について話をしたいと思う。

まず、スマート農業について、「期待や利用状況は」という記載があったが、期待は非常に高い。私達は、水田を 25ha、大豆を 25ha というパッケージで取り組んでおり、田植えの時は足りないのので２名程度他の作業班から融通してもらうことはあるが、おおよそ３名で全ての作業が完結できるという状況にある。普段は１人でも足りているので、まだ余力はあると考えており、これから更に伸びていくのだろうという期待はある。利用状況については、機械が精密なため、私達でやっと思える状況で、誰もが使えるかということ、なかなか難しい。農機メーカーが分かるかということ、地元の営業所ではほぼ分からず、メーカーの技術者でなければならない

のが現状である。次に記載がある、「どのような課題があるのか」と重なるが、指導する体制がまだまだできていないということがまず一点目の課題と感じている。技術はこれからどんどん進歩していくと思うが、ついていけるような指導体制の構築が必要であり、これがしっかりしていれば、人に勧めることができるので、一番大事であると思う。次は、機械の価格であり、どうしても一般的な機械よりも高くなってしまうので、その辺をどういうふうクリアしていくのかがある。三点目は、基盤整備と絡めた形になるのだが、機械に合わせた基盤整備なのか、基盤整備に合わせた機械をこれからメーカーが作っていくのかということである。これは少し先の話になるのだろうが、我々が導入したリモコンの草刈り機では、入れる場所と入れない場所があったり、雨が降るとなかなか難しいなどの問題があり、どのような基盤整備を行っていくのかが課題になると、現場としては、使っている。しかし、それを解決していけば、圧倒的な優位性はある、人手不足にはある程度のところまで対応可能となるほか、新規就農者であっても、機械さえ少し使いこなせば、ベテラン並みの作業ができてしまうので、その辺も期待できている。

今年、スマート農業加速化実証プロジェクト事業の結果が出てくるので、きちんとしたデータが出てくるよう、9月の大豆の刈り取りが終わるまで、しっかりとやっていきたいと思う。

次に1番の方が、人材の確保・育成というのは、どの分野でも言われていて、人口減少が進んでいく中で、県の中でどの分野でもこれに取り組んだ時は、恐らく、相当厳しい取り合いになるのだろうと想像できる。就農しようとしている人や就農した人に対しては、私は、今、それなりに手厚い支援がされていると思っているので、その入口にどういうふうに入ってもらえるかがこれから重要になっていくと思う。先ほど、たねっこでは、「かっこいい農業」をやっていると言ったが、大きな声で外に言うのは少し恥ずかしい気もするが、若い人達の間で、子どもの時って、それが一番だよねという話をしていて、格好良いから真似するよな、カリスマ美容師が流行ったときに、美容師になりたいって思ったよなど。実は、根本的な「かっこいい」って子ども達に対して大事なんじゃないかなと思っている。知事の話にもあったとおり、秋田県は良いところがいっぱいあって住みやすいが、その中で足りないのは、若い人達に「すごいんだよ」、「かっこいいぐね？秋田県」というのを感じてもらえるよう、どのように戦略を立てていくかというのが一番大事なところと考えている。それができれば、農業もスマートと組み合わせていくと、まだまだ将来も明るいと思っている。

○ 江幡部会長

今のスマート農業の実態と「かっこいい農業」と、大変積極的な意見をいただいた。では、次に田口委員から願います。

○ 田口委員

では、資料3の1番、3番、4番くらいでお話させてもらいたい。1番、人口減少時代における担い手・労働力の確保ということについては、昨年、Aターン、東

京から戻ってくる方に補助金を出したりという県の制度を活用してもらったり、秋田を紹介する冊子（「Aターン情報誌 あきた日和」）に、自社の求人情報を載せてもらったことにより、若干名応募があり、採用に至った。県外から来る人材を確保する手法として、それは非常に良かったので、継続してやっていただけたらと思う。手前味噌だが、感じたこととして、その人の話では、子どもが生まれたことが、秋田に戻ってくる、もしくは、地方に行く一つの転機になったということで、旦那さんは秋田以外の方だが、奥さんが秋田出身だった。そうした時に、奥さんの心をいかにつかむか。秋田がよいなという時に、奥さんが秋田に行きたい、子どもを秋田で育てたいという想いを旦那さんにうまく伝えられれば、そうだねとなって、動き出すのかなと思う。上質な生活というのか、価値観は人それぞれで、都会のような百貨店がたくさんあるようなところがよいという方には縁遠いことかもしれないが、豊かな自然や食事があること、ワークライフバランスがとれた環境があること、通勤時間が短いこと、住宅が広いこと、小中学校の教育レベルが非常に高いことなどの良いイメージがあるので、そういったところをうまくくすぐれば、もう少し多様な人材を引き込むことができるのではないかと感じた。後は、事業継承について、贈与税・相続税が納税猶予又は免除される制度があり、これまで80%減免だったのが、2023年の3月までに限って100%減免になっている。恐らく延長してくれるのではないと思うが、この延長及び拡充を改めて提言したいと思う。継承に向けて発生する相続税などが、中小零細企業には非常に負担になっているので、これが減ることによって、秋田に戻ろうかなという事業承継者、例えば息子さんや娘さんが帰ってくるきっかけになればよいかなと思う。

人材を引き込むという面において、3番で、ICTの活用が叫ばれており、その中のツールとして5Gが謳われているが、例えば、ソフトバンクが東北でインフラを整備するのは、まず仙台からということで、秋田に整備されるのはかなり先ということになっている。ドコモが恐らく最初になると思うが、この部分のインフラの投資に対して国や県が何か措置を執れればと思う。コロナ禍でテレワークなど、地方回帰の動きが見られており、場所を選ばない産業として、IT関連企業が既に秋田市に何社か来ているようだが、インフラ整備が進めば、より加速化するのではないかな。先ほどの審議会で知事が言ったような形で進めば、ありがたいと思う。

4番の林業の部分で、スマート林業とまではいかないかもしれないが、今まで、山に何がどのくらいあるのかという森林蓄積量について、スギでは把握できていたものの、はっきりと把握できていなかった広葉樹においても、ドローンを活用して把握できるようになった。また、秋田県素材流通協同組合が事業主体となり、山の情報をインターネットにアップして、相対で取引する取組を始めようとしている。ネット環境がほとんどない山から、各地域へデータがすぐに届くような環境になれば、色々な事業におけるスピードアップも図られるのではないかなと思っている。こうした取組に対する補助金など、前向きな企業に対して厚く支援できれば、よいのではないかなと思っている。木材産業の部分では、川上から我々製材所の川中について、スギに関しては、どこで何を買って、いくらでどうしているというのが

全部わかってしまうので、原木の価格がコストの7割、8割を超えているような、異様な状態が当たり前になってしまっている。製材所は結構、そうした疲弊したような状態に置かれており、これをどうやって変えていくのかは、我々の業界の中で話していくべき部分ではあるが、例えば、川上から川下までの情報を1か所に集約するとか、1つの建物の中にいることで、少しでも早く、スピーディーにコミュニケーションを取れるようにし、何か新しいアイデアを生むなどということは考えられると思う。

○ 江幡部会長

事業継承であるとか、5Gを活用した先進的な林業ということであった。では、次に工藤委員からよろしくお願いします。

○ 工藤裕紀委員

担い手の話からになるが、資料3の1番にある「農業労働力サポートセンター」の用務の内容について、どういうものがあるのか教えていただきたい。それと、資料3の2番の1つ目で、園芸メガ団地や大規模畜産団地の整備や運営をどう見ているかとあるが、農業法人での就農をどのような形でやっているのか。というのは、私はえだまめが大好きで、4月には宮古島のえだまめから食べ始め、最近は関東等、まもなく秋田のものも出てくると思うのだが、おいしいものはおいしい時期があり、この作物であればこの時期がよいなど、その土地に合った適地適作があると思う。ところが、どうしても周年経営を考えると無理せざるを得ない部分があり、人を雇用すれば、時期的に多少人数が多くても雇い続ける法人もあると思われる。周年雇用する人員は必要最小限に抑えて、繁忙期のみ他から人を確保するという体制がとれないだろうかということである。例えば、コロナの関係でテレワークのような就業形態が増えてくると、恐らく、かなりフリーな時間が生まれる場合もあると思う。知人がテレワークをやっているが、日中何をしているのかと聞くと、ノルマがあって、それさえ出せばよいともいう。そういう働き方もあるのであれば、ノルマの部分は集中的にやって、空いた時間に何かをやるなど、そうした多様なスタイルを取り込むことになり、今の若い人達が来てくれるのではないかな。ましてや、秋田は、知事も言っていたが、生活環境としては恵まれている部分がある。そこで生きていく新しい生活スタイルの中に、漁業もうまくはまっていければと思う。3年くらい前に新規で就業した人が、自分が獲ってきたイワガキやアワビを市場に出し、値段がついた時はものすごく面白かったと言っていた。そういう面白みは、自営だからこそある。そうした様々な状況を踏まえた上で、うまく新しい担い手を確保していきたいと考えている。農林水産業を考えた場合、それぞれで研修制度があるが、極端な言い方をすると、大学のカリキュラムのようなもので、1年間この時期に漁業ではこういう研修があり、農業ではこういう研修があるというものである。実際、秋田で農業をやりたいから秋田に来たという人もいるだろうが、何となく秋田に行きたいなという人も結構いるはずであり、そういう人達に合った取組を考えてはどうか。「カッコいい農業」という話があったが、一般市民の方からすると、漁業との間に壁があるように感じている。「カッコいい漁業」とい

うことを考えた場合、一部地区で行われているように、若い人が格好良いウエットスーツを着て、ボンベを背負い、さっと潜ってアワビを獲るとか、やってみないかと言われれば、何となくやる気が出ないだろうか。

つくり育てる漁業関係で言えば、対象魚種となっているヒラメやマダイ、アワビ、サケなど、その水揚げが数千万円単位で落ちている。もう一度、秋田県の栽培漁業をどうしていくのか考える必要がある。今、第八次の基本計画を策定しているところだが、栽培漁業協会のあり方についても、秋田の栽培漁業をこの後どういうやり方ができるかという辺りの議論をしたいと思っている。

もう一つ、コロナの影響で、県外への出荷が制限されている。審議会の資料にもあったが、ほとんどが県外向けの出荷である中、いかにして県内流通を増やしていくのかということについて、漁協だけではなく、水産関係の中央卸売市場や産地の仲買人など、誰かが儲かるという話ではなく、全体で対応していかなければならないと考えているので、県の方からも協力をよろしく願います。

○ 江幡部会長

ありがとうございました。自営業の厳しさと喜びなど色々とお話をいただいた。最後に私からだが、「カッコいい農業」、秋田に人を呼び込むということについて、昔、007を書いたフレデリック・フォーサイス氏が、「イギリスでは、成功した人は田園に住む。ロンドンではなく、ロンドンから3時間ぐらいのところで、かやぶき屋根で羊に囲まれたところで暮らしていて、それが、イギリス人というか先進国の幸せだと。アジアでは、高いマンションに住んで・・・となるが、そういうのは田舎者だよ。」と話していたのが印象に残っている。そろそろ日本人も価値観として、成功した人は田園に住む、秋田に住んでいる人は幸せだというイメージができればよいなとも思っている。

資料3の1番に関して、弊社では、野菜の袋詰めなどを行うため、秋田市内の13の福祉施設と提携しており、日にもよるが100名以上の生徒さんが袋詰め作業に従事している。これは、パートが集まらなかったりする事態の解決策として模索してきた結果、自然と行き着いたものである。一時的な季節もの、例えば、えだまめの加工は8月と9月しかないが、その期間、福祉施設にお願いすることになる。そうした中で、農林水産物の高付加価値化というところで、先ほど、販売チャネルの多様化の話もしたが、福祉施設と一緒にやる自動計量器の購入などには補助金をいただく仕組みがなかった。従来の補助金は、限られたところに限られた形だというイメージを持っている。我々も秋田県の農家の所得を向上させようという活動をしている中で、流通にも補助金がつくような道はないものかと思っている。また、にんにくについては、ニンニク協議会と話をし、市場を活用し、首都圏のスーパーなど多方面ににんにくを販売しようと話し合っているが、弊社には大きな冷蔵庫がないため、一部で芽が出てきてしまう。今は少量だからうまくいっているが、そうした嫌な話も農家にしなくてはいけない。高付加価値化、販売チャネルの多様化の観点からも、柔軟な補助の仕組みをぜひ考えてもらいたい。

「カッコいい農業」の関係で、茨城県の行方へさつまいもを買い付けに行ったと

ころ、日本農業大賞をもらったところらしいが、若い農家の方が外車でＪＡに乗り付けていて、素直に格好良いなと思った。農家の方が高いお金を取れるようになり、若い人たちが皆後に続くのだらうと思った。

また、共選共販のすばらしさもあるが、今の若い人は、個選個販というか、俺の作ったものは俺が売りたいというのは当然の気持ちというところもあり、その気持ちを大切にしていきたいと思っている。

□ 本藤園芸振興課長

園芸振興課の本藤と申します。先ほど、工藤裕紀委員から農業労働力サポートセンターの設置の御質問があったが、この労働力サポートセンターは、県域で労働力を確保する仕組みを構築するため、令和元年の７月に設立したもので、関係機関、農業法人協会やＪＡ秋田中央会、全農秋田県本部、県が構成員となっている。業務内容は、１つは、ＪＡの無料職業紹介所の設置支援で、現在、県内３ＪＡで地域内の雇用の確保に向け色々と斡旋の取組をしているが、そういったものの設置支援、また、受入時の雇用環境づくり、労務管理などのセミナーも併せて実施している。さらに、多様な人材ということで、先ほど農福連携の話もあったが、例えば、障がい者の方や子育て世代の奥さんなどを含めた人材の確保に向けて取り組んでいる。地域内の雇用の確保のためには、地域の事情がわかるＪＡが斡旋する形がよいということで、県内１３ＪＡでの無料職業紹介所設置を目指して進めているが、昨年度の実績としては、３ＪＡトータルで、求人が８４件に対し求職が５６件、マッチング成立が４１件ということで、例えば、えだまめやねぎのメガ団地の繁忙期にうまく人を紹介して、雇用を確保できているという循環もできてきているので、どうにか全ＪＡでの展開を進めていきたい。

○ 工藤裕紀委員

全くの素人の方が求職されており、そういう方でも大丈夫な仕事だと思うが、この時期、こういう作業があつて、必ず人手不足になるということであれば、その作業のプロのような人をある程度固定化した方が、受入側もやりやすいと思う。先ほど、工藤浩一委員から、機械も、操作がきっちりできれば、初心者でも大丈夫だという話があったが、その時期がある程度限定されとなると、そういう技術を持った方が毎年６月なら６月に来るという形ができてくれば、おもしろいのではないかと思う。

□ 本藤園芸振興課長

今、工藤裕紀委員がおっしゃったように、ＪＡの紹介所は、地域毎に、技術を持った方がある程度長い期間働くような形であり、一方で、１日バイトというアプリを使った取組をしていて、学生が休みの日に手伝いに来るとか、奥さん方が、都合のよい日に行ってみようかなど、どちらかという、誰でもできるような軽作業で、マッチングの多様性を求めていきながら、他の地区からなど、労働力確保の方法にバラエティを持ちながら、取組を進めているところである。

○ 工藤裕紀委員

今、全体の労働力が不足している中で、そういった取組が必要になってくると思

う。一つの事例として、男鹿の漁業者で、梨の収穫で知り合いの農家のところに行くが、その代わりに、12月のハタハタの時期にその方から手伝いに来てもらうなど、個人の繋がりであまりよくやっている人もいますので、そういった情報を組織的に集めて、何とか人手を集めていければよいと思う。

○ 田口委員

資料3の4番に関連する県の施策に、「中高層建築物に利用可能な木質2時間耐火部材の開発や建築人材の育成を推進」とあり、その関係で、例えば、川上から川下までの情報を1つにまとめるという意味において、林業木材産業会館というものを建てられたらと感じている。1階を駐車場にして、2～4階を川上から川下までの業態の方に入居いただいて、一番上は大会議室や懇親会場にするなどして、建物はCLTや2時間耐火部材といった、国や県として補助を出しやすいような木造の建物を建てる。そこで県木連を中心に連携しながら事業を進めていくこともあり得るかと思う。川上は県森連や素流協など、川中は製材業など、川下で工務店など色々あるかと思うが、民間だけではなく、県庁林業木材産業課の分室や、東北森林管理局の分室といった形で、官と民が一緒にいるような建物があれば、スピードアップに繋がって面白いのではないかと考えている。

また、先ほど、製材所の原木に要する費用がかなり高くなっているという話をしたが、それに対応するためには、生産性を上げるしかないと思う。あくまで個人的な意見だが、そのためには、製材所の規模を一定程度大型化せざるを得ず、その時に、秋田製材協同組合のように県北に1つ、県南に1つ、県内の企業の人達で大型の製材所をつくるような方策も考えていくべき時が来たのかなとも思っている。民間で県南にも県北にも大きなところがあるが、そことタイアップするような形など、何か推していかないと、中小零細規模の製材所が立ち行かないような形になりつつあるかと思っている。成長企業という意味での、ある程度大型の製材所ができれば良い。願わくば、県外から来て、収益が全部県外に納められるというのではなくて、県内できちんと落としてもらうという絵が描けたらよいなと思っている。あくまで個人的な意見ではあるが。

○ 工藤浩一委員

資料3の2番の関係で、審議会の資料で、メガ団地の整備が進んでいるが、必ずしも全て経営が順調な訳ではないという説明があった。状況はわからないが、新しく法人を立ち上げた時や大規模化した時に、個人経営とは全く違った規模でスタートするので、まずは、組合員の人達と作業の遅れが出て、そこから全てがずれて、なかなかうまくいかないというのが、最初の壁だと思っている。例えば、キャベツを10a作るのと、1ha作るのでは、全く作り方が違うということがあり、そういった、最初の部分の切替えが難しいだろうと見ていた。部会長にも教えて欲しいのだが、えだまめ、ねぎ、しいたけが順調に成績を上げているという中で、県内の農家が日本一を取るような産地を目指して取り組んでいることが、東京の市場に伝わり、市場からその評価が聞こえたりするものなのか。

○ 江幡部会長

えだまめが秋田というのは徐々に定着してきていると思うが、まだ天狗印などに対抗できておらず、価格面でブランドが確立されていない。それをどういうふうに埋めるかということで、弊社では「一徹豆」にも取り組んでいるが、まずは、成功に向かって進んでいるといったイメージはあると思う。

○ 工藤浩一委員

私はえだまめには取り組んでいないし、当法人で作っている野菜のほとんどはJ A系統出荷ではないので、そういった情報が入ってこないのだが、活気があまり見えないと感じていた。いつの間にか、しいたけは三冠王を取っていて、すごいと思うし、近くにしいたけを栽培している人はいるが、そうした盛り上がりがないと感じる。

○ 江幡部会長

ねぎは、J Aあきた白神管内に行くと、農家の盛り上がりがすごいし、やる気の出る農家も増えているのではないかなと思う。東京のスーパーからも、秋田のねぎが欲しいという話はどんどん来ている。

秋田のえだまめは、ブラインドテストで食べ比べても、味が良いとされるが、たくさん食べる我々と違い、関西ではお通し程度で、小皿に入ったものしか食べないといった食習慣の違いもあり、その辺もおもしろいなと思う。秋田のえだまめは、コールドチェーンを考えて、品質の良いものを出荷していくと、クオリティが高く、天狗印などにも負けないえだまめになると思う。

冷凍品についても、国産のニーズはあるし、来年から加工品も国産と表示ができるそうなので、そうしたニーズは、より高まると思う。

○ 工藤浩一委員

資料2上部の「推進方向」で、最後、農山漁村の活性化を図ると結んでいるが、メガ団地と一体となったほ場整備の推進や、法人の規模拡大や、先ほどの製材工場の大規模化もそうだが、本当に真剣に取り組んでいかないと、例えば、私達の地域でたねっこがつぶれたらどうなるんだろうなと思うが、どこの法人を見てもそうだと思う。メガ団地と絡めて法人を設立してとなった時に、その地域の活性化の一端を担うことになるし、その逆にもなり得るので、実行するのは各地域の人達だが、その地域を背負う緊張感は持ってもらいたいと思うのと、そういうふうにしていかないと、その地域を守っていけないので、バランスを考えながら、その方向でしっかりと進めていってほしい。

○ 江幡部会長

まだまだ意見もあるかなと思うが、予定の時刻となったので、意見交換を終了させていただく。弊社の社長がいつも言っているが、秋田が元気になるためには、農林水産業が元気にならないといけないし、農林水産業が元気になってこそ、秋田の経済が回っていくと我々も考えているので、ぜひ、よろしくお願いします。事務局においては、本日出た意見を参考にして、次回まで論点を整理いただきたい。

□ 伊藤次長

最後に、私から一言申し上げたい。

大変熱心な議論をいただき、感謝申し上げます。話を伺って、委員の皆さんから、農林水産業に対する愛を感じた。色々な意見をいただいた中で、特に共通してあったのが、担い手をどうやって確保していくかという点である。我々はどうしても、新規就業者を確保する時に、農林水産業の意義や、やりがい、自然を相手にする仕事だとか、食料自給率の向上に資するなど、色々な目的を訴えながら投資していく。一方で、単純に「カッコいい農業」とか、奥さんの心をつかむことが移住の決め手になるという話があったりとか、イギリスで成功した人は田園に住むという、そういうイメージから変えていかないとという話もあったが、意外に、移住や就業を決める人達の心というのは、きっかけというのは、単純なものなのかもしれないなということを今日の意見を伺って感じたので、そういったことも今後の施策を検討するに当たっては、考えていかなければならないと感じた。また、部会長からは、にんにくの話の中で、受入体制が十分整備されておらず、受け入れられなかったとの話があった。我々はどうしても、生産振興の方に重きを置きがちだが、生産して流通させて、販売をして消費していただくという循環の中で農林水産物は回っていくものだと思うので、そういうバランスを欠かないような施策の組み方というのも一つ考えていかないといけないのかなと感じたところ。林業木材産業会館の話については、県も財政状況が厳しいところではあるが、そういった意見もあるということで承る。その他、色々御意見いただいたが、次回までに論点整理させてもらい、また関連の情報なども付け加えさせてもらい、議論の題材を作って、皆様から御意見をいただくようにしたいので、引き続き、よろしくお願いします。

－ 議事終了 －